

第 14 回高知県 Next 次世代型施設園芸農業に関する産学官連携協議会 議事録

日時：令和 7 年 9 月 12 日（金） 15:30～16:30

場所：高知県庁本庁舎第二応接室（+オンライン開催）

1 開会

2 議題

（1）研究推進部会全体の実績と計画

資料に基づいて、本家部会長より説明がなされた。

（2）人材育成部会全体の実績と計画

資料に基づいて、津江部会長より説明がなされた。

（3）SAWACHI の普及状況と域外展開について

資料に基づいて、齋藤企画監より説明がなされた。

質疑・意見交換

（受田学長）

高知大学学長の受田浩之でございます。3 つ質問をさせていただきたいと思います。齋藤企画監からご説明があった岐阜県を中心とするマネタイズの仕組みです。率直に言って、最終的に利使用料をどれくらい得られるかというところが一番全体を回していく上で肝になりますので、利使用料をどれくらい見込めるのか。これがまず一つ目の質問です。それから普及に関して、直近の数百年を見ると頭打ち傾向に見られる。これで頭打ちなのか、もうここが限界というふうに見ていくのか。もし、その限界を超えれば、具体的に現場でどういう工夫をしていこう

とされているのか。それは大学としても責務がありますので、我々がやるべきことはないのかという質問です。

最後は知事にお伺いしたいんですけども、このIoPの事業は終盤に差し掛かっております。地方大学・地域産業創生交付金は10年間のプロジェクトということで、令和9年度が最終でございます。その前にあたります令和8年度が展開枠の4年の最終年ということになります。私ども国立大学法人として、令和9年度は第四期の中期目標、中期計画の区切りの年にあたります。従いまして、令和10年度以降の第五期の中期目標、中期計画の具体を考え始めるタイミングに差し掛かっております。その中で、このIoPの事業をさらに飛躍していくために、どのように展開をしていくか、ビジョンを描いていくところが肝になります。そもそも、この地方大学・地域産業創生交付金事業を立ち上げる場合に、高知県の産業振興計画、また農業振興の分野の目指すべきビジョンや求める姿を描いていただいて、それに対してIoPの技術を具体的に活用していくようなプロジェクト創出をやった記憶がございます。そういうふうを考えていくと、今後、県が目指す施設園芸農業のビジョン、そして、それにつなげていくIoPの位置づけを、ぜひとも描いていただき、それに対して大学として研究者がどういうふうコミットしていけばいいのか、これを考えていきたいと思っております。

そういう意味で知事に質問申し上げたいのは、高知県の産業振興としての今後の施設園芸農業のビジョンづくりについて、今どういうふうにお考えになられているのかを、伺えれば幸いです。

(齋藤企画監)

利使用料ですが、A県が企業にSAWACHI構築するときに、高知県で構築にかかった費用の10%を納入していただく形になります。それから今後、SAWACHIの利用者を増やしていくための取り組みですけども、まずやはりSAWACHIのメリットというところをPRして、そのメリットにご共感いただいて入っていただくというところが、今後進めていくための一番重要な方策かと思っております。この表を見ていただいているんですけども、この3,324というのは、私のデータをSAWACHIの分析に使っていただいて構いませんよ、というところで同意をいただいている人数となります。ところが、実際この中でSAWACHIを使っている方が1,680というところで、この半分の方はデータを提供していただいていますけれども、SAWACHIにはまだ入っていない。SAWACHIに入っただけだと、この出荷データも見ることもできるというところで、そういった方にターゲットを絞って取り組みたいと考えております。

また、プロジェクトの方でもいろいろと研究をやっていただいております。SAWACHI のメインとしまして、例えば営農支援 AI エンジン、それから生理生態 AI エンジン等も SAWACHI でご利用いただけるようにして、生産者の方にそれを使っていただく。研究成果を今後どんどん使っていただくということも、SAWACHI の発展につながっていくと思いますので、現在プロジェクトで取り組まれている研究を実装していただけるように大学さんにもご協力いただければと思っております。よろしく申し上げます。

(濱田知事)

施設園芸農業のビジョンということであります。今、本県の産業全般が、やはり人口減少対策を考えました時には、若者の就業、農業で就農をどう促進できるかというところが一番ポイントになっていると思いますし、そうした中でどう稼げる農業を実現していくか。農業の分野はそうした今、問題意識で見ているところであります。

その中で今、業種別に所得向上を図るために今何ができるかということで、今念頭に置いてますが、特に重点的にやっていこうというのが 5,000 万円です。5,000 万円以上のハウス園芸農家ということターゲットにして、そこで特に雇用形態でどういう形で若い方々に農業に入ってもらえるかというところを今、今年度前半に集中的に勉強してもらってまして、その辺がコアになる部分だというふうに思っています。特に農業で考えましたときに、やはり本県の場合、野菜が 7 割ということでありまして、この持つておるハウス園芸農業の優位性から考えても、これはやはりコアになっていくことは絶対間違いないと思っていますから、そうした中で今お話があった令和 9 年度は、産振計画の次の節目の年とも重なっておりますので、そうしたタイミングで、一つは、このハウス園芸農業での野菜の産出に関して、どういう量的質的なビジョンを描いていくかというところが、産振計画の改定の大きな論点の一つでもあると思っていますし、一次産業の分野ではやはり最もポイントとなる分野だと思っていますので、そうした観点で定量的あるいは定性的にどういう方向を目指していくかというのを、次の産振計画の改定の中で大きなテーマとして掲げて、方向を示していかないといけないと思います。

また IoP との関係では、これは今、部の方に宿題というか、申し上げているんですが、まさしく展開枠の期限が同じようなタイミングで出てくるという中で、このシステムをですね、当初目指した自走ということに向けて、今お話しがあった利使用料の話なんかも含めて、経済的な出入りの見通しということも含めて、これもどういう絵を描けていくかということで、研究をどう続けていただくかということも含めて大事なポイントだと思っているので、ちょうどそういう非常に大

事な時期に、今、差し掛かっていくという認識のもとに、研究の方も含めまして、産業面も含めて、向こう数年間、あるいは10年程度をみたときに、どういう方向を目指していくかというところを、ぜひ高知大学の皆様のお考え、お知恵もいただきながら、県としてもしっかりと見通しを立てていく、ビジョンを作っていくということが大事だというふうに思っております。

(受田学長)

私ども、しっかりとご一緒させていただきたいと思っております。で、その際には是非とも野心的な絵と一緒に描かせていただき、そしてそこには農業のみならず、関連産業のコミットメントが必ず求められ、それによってイノベーション創発という産業振興計画のキーワードが必然として生み出されていくというふうを感じる場所です。ぜひとも大きな絵姿を、ご一緒にデザインできるように、これからガッツリ組ませていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

(山崎会長)

複数のスーパーの社長さんに、「今年どうよ」と聞くと、野菜のA品が少ない、年々その傾向が酷い、梨が新高が全滅みたいな、そんな話もある。今すぐCO2の排出が止まっても、この暑さは続く。気候変動はおさまらない。暑さ対策の必要に迫られているという感じがある。聞くところによると、ハウスの遮光はハウスの上に何かかけるようなものがある。エネルギーであえて冷やすわけにいかないので、そういう原始的な方法をうまく使って抑えていくというふうな。熱線は抑えて、光合成に必要な光は通すみたいな、技術開発をして、それを導入するための補助金みたいなものの準備を素早くしていかないといけない。半年パタッと取れなくなっちゃったら終わりますので、研究も含めて大事なフェーズだと思いますので、そこら辺も、ぜひ備えていただきたいと思います。

(齊藤企画監)

対策としまして、おっしゃられたように、ハウス内の気温上昇の原因とありますが、赤外線は弾くけど、作物に必要な光を通すようなシートが開発されておりまして、それを使って、今現場の方でも試験をしている段階です。その中にSAWACHIを搭載したハウスもありまして、収量がどれくらい取れるか、そういったデータを今とっておりまして、まあ今後それをきちっと分析して、皆さんに広げていきたいということで考えています。

(濱田知事)

IoP 農業研究会というのがありますが、これは農家の方々も含めて、多分この IoP をどう現実に営農に使っていくかということについて、少し夢のある部分も含めて、こんなことができたという話とかいうことも語られているのかなというふうに想像するんですけども、先ほど受田学長からお話のあった将来も見据えたがつつり夢のあるものを作っていくという面でも、IoP の自走に持っていく面でも、現場の農家の方々がこの営農にどう使えるかというところのニーズというか、そういうのを測る意味では大変大事な研究会だし、どんなお声が今出ていて、どういうことをターゲットにしていけばいいのかという点で大変関心があります。

もしこの場でエッセンスだけでもご紹介をいただければありがたいし、そうでなければ、追々、その辺を教えていただくと、今後の方向を見定めていくと、いろんな大事なヒントになると思いますので、ぜひその現場の農家の方々がこの IoP を通じて、どういうことができたらいいかということのニーズを持っておられるのかを、アンテナを高くていただいて、またそのためにどんな研究が必要なのか、それでどういう収支の面でのメリットが期待できるかというところが、一番ポイントになるところだと思いますので、ここの研究会の動きというところのフォローをお願いしたいと思います。

(齊藤企画監)

現在、IoP 農業研究会は、4 品目のワーキンググループができておまして、それぞれの構成員で研究された生理生態 AI エンジンのデータを実際の現場で使っていただいて、そのワーキンググループには、生産者の方、それから研究者の方、県の研究者が参加して情報共有をしています。そこで様々な情報交換をしながら、そういった研究をいち早く、普及の方に、現場で使えるような技術にブラッシュアップしていくために取り組みを進めています。

(濱田知事)

ぜひニーズの場を拾って、すぐできるかできないかはありますけれど、どうマッチングできるのか、研究サイドも含めて、それは大事じゃないかと思います。

3 閉会